

東洋文化は地球を救うか

九州大学工学部材料工学科
教授

小野寺 龍太
Ryuta Onodera



最近やや影を潜めてきたが、一時、西洋の文化は行き詰まって、これを救うものは、東洋文化であるという議論が盛んに行われた。今になって振り返ると、このような議論はわが国が高度経済成長からバブル経済まで、右肩上がりに経済発展を遂げていた時代の、金力を背景にした文化的バブル現象であったように思われる。景気の後退とともに、文化の意気込みも尻すぼみに終わってしまった。しかしながら、人々が西洋文化の行き詰まりと言う時、それは物質文明の行き着く先に対する漠然とした不安を意味するものであったので、これは現代において特にその重要性を増している問題であり、自然破壊や産業廃棄物などは、わが国の景気の後退などとは無関係に、今後人類が直面する最大の問題であろう。私は物質文明の野放図な発展に対する処方箋をこの随想で書いて見ようと言うのではない。それはあまりにも大きな問題で到底私などの手に負えるものではないからである。ただ東洋文化はこの問題に対して回答が出せるとは思えないということについて書いて見ようと思う。

そもそも西洋文化に対して東洋文明という一体のものがあるだろうか(これについては津田左右吉先生の書かれたもので私は目を開かれた。興味のある方は名著「支那思想と日本」(昔は岩波新書から出ていたが今はどうだろう)をお読みください)。西洋の文化というものはキリスト教とギリシャ・ローマの古典文明を基本にしており、欧州各国はそれぞれの独自性を持ちながらもあるまとまった文化を形成している。しかし東洋では、中近東のイスラム文化、インドのヒンズー文化、

支那の道教および儒教の文化、日本の神道やわび、さびなどの伝統文化はそれぞれ別々のものであり、相互の関連も切磋琢磨もほとんどない。

日本人はいろいろな文化を受け入れて、一見すると真似ばかりのようだが、それは自分に受け入れやすいところだけを受け入れたので、丸ごと受け入れたものは少ない。このことの善悪は一概に言えないとしても、支那の文化を取り入れたとき、都市の作り方や位階官等の様な形があるものは真似をしたが、人間関係(家族制度)は勿論、形があるものでも日本の社会体制に大きい変革をもたらすもの、例えば、科挙や宦官の制度などは取り入れなかった(ここが朝鮮と異なる所である)。このことが封建制度という、西洋にはあっても東洋にはほとんどない制度が日本に生まれた理由の一つであるのだろう。ちなみに封建制度は悪いもののように一般には思われているが、何かに対する忠誠心(八幡太郎義家だったり、浅野内匠頭だったり、明治天皇だったり、三井物産だったり、フジコーだったり)を生んだのはこの封建制度のお陰である。支那の文化の制度は君臣は生むが主従は生まなかった。支那の文化の影響に比べれば明治以降の西洋文明の影響はより根本的なものであったように思われる。着る物、食べる物、親子の関係、など生活の基本的要素から科学、物質文明、産業界と言うものまで、すべてが西洋の通りになったわけではないが、江戸時代とは大きく変わっている。

さて本題である物質文明の発達はこの西洋化の波と共に始まったものである。アジア、アフリカ諸国も所謂先進国のようになろうと努力している。しかしここ

が問題である。元来、我々日本人も含めて非西洋の文明は科学や技術を発展させるようには出来ていなかった。その結果、それらの国々は西洋文明の目に見える果実だけを手に取ろうとし、その結果産業と軍備のみが発達する。わが国は非西洋の国々の中では最もうまく西洋文明を取り入れ、よくやったのであるが、それでも満州事変から太平洋戦争までの失敗を経験しなければならなかった。今後発展すべきアジア、アフリカの諸国はより苦しい状況におかれると思われる。その苦しさの原因のうち最大のものは、地球(土地や資源)の有限性と人口の爆発である。この地球上で少数者(数億人)が安楽な生活を送ることは可能だが、数十億人がそうなることは出来そうにない。本来ならここで東洋の叡知なるものが出てくるはずであり、人間の幸せは物質の充足にあるのではないとか、自然にしたがって死ぬべきときに死ぬべきだとか、人の心に安心立命を与えるといいのだが、現在のアジアを見渡してそんな様子は全く見えない。これらの国に現われるのは単なるナショナリズム(これは必ずしも西洋文明から由来したものではなく、中国や韓国のそれは儒教的な一種の威張りたがりであり、イスラム諸国はコーランの教えから来るのかもしれないが、それらが国家的立場として現われるのは西洋の「国民国家」の影響なのだろう)だけのように見える。

ある文化と言うものは、自らそれを産み出し発展させてきた国民においてはその行き過ぎや過剰を抑えようとする反作用の様なものが自然に出てくるが、自分のものでない文化には単に一方向への発展があるのみではなからうか。私はこのことが歴史的に見て正しいかどうか知らないが、ある環境の下で発達した仕組や

文化が、違う環境の下におかれると本来の機能を発揮しないことは動物の行動にも見られる。例えば広い土地に住んでいる群居性の草食動物を狭い檻の中で飼うと強い雄が弱い雄を殺してしまうことがある。これは群居性の肉食動物にはない行動である。それと同じように、自分のものになっていない文化を直輸入したら、その輸入文化を否定する運動は起こっても(イランのイスラム革命や神風連の乱の様なもの)、その良い点を残しつつ、その欠点を克服しようとする反作用は起こらないのではないだろうか。これがこの小論で私が言いたかった「東洋文明は現代を救わない」だろうという根拠である(ほとんど根拠とは言えるものではないが)。

それなら未来の救済はどこにあるかといえば、私はやはり西洋人の考えの中に真剣な反省と具体的な対応が育ちつつあるように思われる。冒頭に述べたように、現在の最も大きい問題は、物質文明の野放図な発達をどう止めるかにあると思う。私が所属する工学部でもエコマテリアルとか省資源、省エネルギーだとか時流に合わせていろいろなキャッチフレーズが飛び交うが、どんなに経済的に作っても、ものを作って消費する限り、何の解決にもならない。不必要なものは作らず、使わないのに優る解決はないだろう。この点ヨーロッパ諸国は世界で最も進んでおり、不必要な工業生産品の不使用(ペットボトルや飲料の自動販売機)、および自然保護や動植物の保護にかけては、明らかに先進国である。わが国が西洋に先駆けて、自然保護のような新しい価値観を産みだし得なかったのは残念であるが、非西洋諸国で真っ先に西欧文明を取り入れた国であるのなら、せめて自然保護に関してもほかのアジア諸国に模範を示すべきであろうと思う。